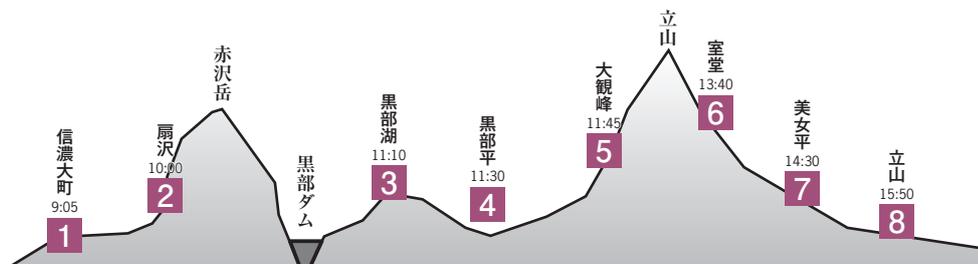


# 設立20周年記念企画 黒部ダム見学会

実施日：平成28年9月8日(木)～9日(金)



戦後の急速な経済復興に伴い関西地方は深刻な電力不足に陥りました。そこで関西電力は、開戦以降お蔵入りとなっていた黒部ダムの建設を決意。高い山々に囲まれた黒部の土地は古くから人々を寄せ付けない地形のため困難を極め「世紀の大工事」と呼ばれました。その様子は映画やテレビで映像化され、今も語り継がれています。当会設立20周年記念企画として先人たちの偉業を見学する記念企画を開催しました。



## 立山黒部 アルペンルート (1日目の行程)

|          |          |          |          |   |
|----------|----------|----------|----------|---|
| <p>1</p> | <p>2</p> | <p>3</p> | <p>4</p> | <p>1 「路線バス」<br/>市内と扇沢をつなぐ</p> <p>2 「関電トンネルトロリーバス」<br/>赤沢岳をくり抜いた関電トンネルを抜け黒部ダムまで走る</p> <p>3 「黒部ケーブルカー」<br/>日本で唯一、全線地下式のケーブルカー</p> <p>4 「立山ロープウェイ」<br/>景観保護のため支柱が1本もなく、動く展望台とも呼ばれている</p> |
| <p>5</p> | <p>6</p> | <p>7</p> | <p>8</p> | <p>5 「立山トンネルトロリーバス」<br/>雄山の真下を通り抜け、日本最高所のトンネルを走る</p> <p>6 「立山高原バス」<br/>標高差1500m、変化に富んだ高原を結ぶ</p> <p>7 「立山ケーブルカー」<br/>最高29度の急勾配を昇降する</p> <p>8 「富山地方鉄道」<br/>山々を抜け富山平野の田園風景を走る</p>        |



左／切り立った崖の上には小さく休憩所が見える(黒部ダム)  
 中央左／当日は生憎の天気だったが秋には綺麗な紅葉を見ることができる(立山ロープウェイ)  
 中央右／室堂から先は濃霧に包まれ幻想的な景色になる(美女平)  
 右／普段なかなか乗ることがないケーブルカーに乗れて笑みがこぼれる参加者(立山ケーブルカー)

## 建設時のトンネルを抜け黒部ダムへ

見学会1日目は、長野県信濃大町から立山黒部アルペンルートで黒部ダムを見学し、富山県黒部市の宇奈月温泉まで向います。

まずは、路線バスに約40分乗り赤沢岳にある扇沢へ。そこから日本で唯一の電力で動くトロリーバスに乗り換え、関電トンネルを通り黒部ダムへ向かいます。もともとこのトンネルは、黒部ダム建設のために掘削されたトンネルで、今でも発電所の資材運搬用に利用されています。途中、4℃の冷水が毎秒660ℓも噴出し、黒部ダム開発時の最難関工事であった全長80mの破碎帯を通り抜けます。現在の破碎帯は青い照明に照らされており幻想的でした。

トロリーバスを降りると待っているのが、黒部ダム展望台へと続く220段の地中階段。ここでは破碎帯の湧水が自由に飲めるスポットがあります。

## 大自然の中にたたずむ黒部ダム

階段を上りきると黒部ダムにご対面。展望台からは、北アルプスの緑豊かな大自然の中で豪快に放水している黒部ダムを見下ろすことができました。堤高は186mで日本一の高さを誇り、アーチ式ダムとしては最長の492m、毎秒10t以上の水を放水しています。その迫力に参加者の方々は息を呑み、見入っていました。放水の様子を見下ろしながら歩くと、端から端まで移動するのに20分ほどかかり、黒部ダムのスケールの大きさを実感しました。

## 6つの車両を乗り換え立山連峰を越える

黒部ダム見学が終わると、次は室堂を目指します。黒部ケーブルカー、立山ロープウェイ、立山トンネルトロリーバスを乗り継ぎ1時間ほどで到着。室堂は標高2,450mという高所で、立山三山をはじめ3,000m級の山々を望めたり、登山や散策する観光客で賑わう場所です。ここでは立山の郷土料理のさらさら鍋を満喫し、周辺散策をする予定でしたが、雨が降っていたので室堂ターミナル内を散策。その後、立山高原バス、立山ケーブルカー、富山地方鉄道を乗り継いで宇奈月温泉の宿へ。合計4時間ほどの移動で参加者の方々はお疲れ気味の様子。

移動を通してあらためて黒部ダムが奥地にあることを再認識し、人力による資機材の運搬や雪積もる立山を自走ブルドーザーで越えた先人たちの力強さに驚嘆させられました。



参加者の方々と集合写真



汽笛を鳴らしながら新山彦橋を通過するトロッコ電車

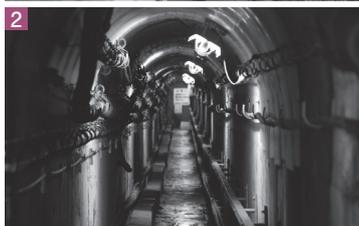
## 黒部渓谷の景色を車窓から楽しむ

2日目は、関西電力が協力している「黒部峡谷パノラマ展望ツアー」に参加。このツアーでは宇奈月駅からトロッコ電車で樺平駅へ行き、そこから機関車に乗り換え、普段は立入禁止となっている黒部渓谷の奥まで行きます。

トロッコ電車はもともと黒部峡谷の電源開発の際、物資輸送のための専用鉄道として昭和12年に開通しました。国立公園に指定されているこの峡谷の探勝を希望する一般の方が多くいたため、自己責任を前提に乗車を認めました。昭和28年には安全面の整備を行い営業免許を取得し、現在にいたっています。

このツアーではまず、黒部峡谷の大自然とダムや発電所を車窓から眺めながら、終点の樺平駅ま

で向かいます。宇奈月駅を出発後、すぐに渡るのが新山彦橋です。全長166m、赤一色の鉄橋が緑の中にかかる姿には目を引かれます。次に見えてきたのは新柳河原発電所です。この発電所は宇奈月ダム建設で沈んだ柳河原発電所の代わりに建てられました。西洋の城をイメージしている外観は発電所とは思えない斬新な建物です。さらにトロッコ電車に乗っていると黒部川第二発電所が目飛び込んできました。そこからしばらく進むと姿を現したのが小屋平ダムです。この2つは、建築家の山口文象が国立公園にふさわしい構造物というコンセプトのもとデザインしたものです。建築家と土木技術者が景観から構造まで協力してつくりあげたのです。



1 宇奈月駅では電源開発の歴史の映像も流れている

2 積雪によりトロッコ電車が使えない間、作業員はこの通路を歩き宇奈月から樺平まで向かう(冬季歩道)

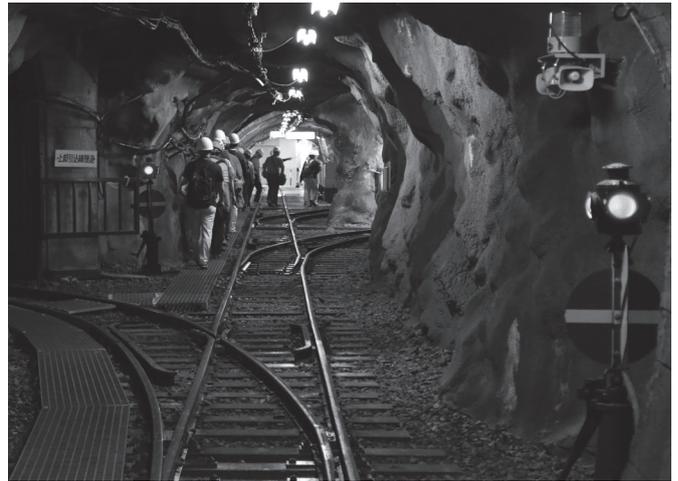
3 特徴的な形の排砂設備の出し平ダム

4 トロッコ電車では電源開発で掘られたトンネルも通り抜ける

5 2日目には参加者同士も打ち解け、しばし笑顔がみられた



高熱隧道も通過できるように耐熱仕様になっている凸型機関車



貨車も通れるよう中央にはレールが敷いてある上部トンネル

## 黒部溪谷の深部へ

80分ほど車窓からの景色を楽しむと終点の樺平駅に到着。ここからは関西電力のガイドである杉本さんと合流してヘルメットを被り、一般の方が入れない峡谷のさらに奥へ。

昭和10年頃から使用されている凸型機関車に乗り、黒部第三発電所建設の際に掘削された下部トンネルを進み豎坑エレベーターを目指します。このエレベーターは仙人谷ダム建設の際につくられたもので、約200mある高低差を約2分で上がり、建設当時は世界一と呼ばれていました。「これから歩く上部トンネルは166℃の岩盤を採掘して建設されたことにより、高熱隧道と呼ばれています。ダイナマイトが自然発火して多数の死者がたり、熱中症で作業員が次々と倒れる難工事で、その過酷な様子は小説にもなりました」と話す杉本さん。その先の豎坑展望台、パノラマ展望台では周辺の山々や地形の特徴について説明してくれました。

エレベーターを降りて5分ほど上部トンネルを

歩くと豎坑展望台に出ました。険しい山々を望み再びトンネルへ。1列に並んで歩くこと250m。途中、いくつも枝分かれしている工事通路が気になりつつもトンネルの出口に到着。ここからは、最終目的地の鉄塔敷地内にあるパノラマ展望台へ向けて15分ほどの登山です。急な斜面に設けられた丸太栈道で落ちないか足元ばかり見てしまい、周囲の景色を楽しむ余裕がありませんでした。栈道を登りきると後立山連峰等の山々を360度のパノラマで見渡すことができ、参加者の皆さんは絶景を楽しんでいました。

黒部の開発では破碎帯の水、高熱隧道の熱という自然の猛威が人々を襲ったことに驚愕しつつも、立ち向かった当時の人々の功績には感服しました。参加者の方から「さまざまな困難を乗り越えつくられた黒部ダムは、一度目にしたいと思っていたので、このような機会があり本当によかった」等、土木の先達の苦勞をしのぶ声を頂き、満足して頂いた見学会となりました。



差し棒を使い冗談を混ぜながらガイドをしてくださった杉本さん



短い距離ながらも本格的な登山道



鹿島槍ヶ岳、奥鐘山を背にしたからの集合写真

## 設立20周年記念企画

# 大磯城山公園・旧吉田茂邸庭園見学会

実施日：平成28年10月4日(火)



モダニズムを加えた和風庭園の先駆けである旧吉田茂邸の庭園。吉田茂自慢の日本庭園の歴史をめぐる見学会を開催しました。

### 歴史から日本庭園を学ぶ

見学会は、会員企業の皆さまの他に、講師として東京農業大学の教授である鈴木誠教授と鈴木教授の研究室に所属する学生にもご参加頂き、計26名の参加者のもと実施いたしました。

午前中は公益財団法人神奈川県立公園協会との共催で講演会を実施いたしました。鈴木教授を講師とした「日本庭園の魅力～庭の見方、楽しみ方」の講演では、公園協会から申し込みを頂いた一般の方約20名が加わりました。

鈴木教授には、日本の中世時代から現代の庭づくりの歴史の変遷、自然環境や風土による違い、西洋の庭園との比較について写真、映像を通してお話をして頂きました。講演の冒頭では「庭とは何か？『日本庭園』をキーワードに思いつく言葉を5つ挙げてみてください」と鈴木氏から参加者の皆さまに質問がありました。これまでも多くの日本人、欧米人に同じ質問をしてきたとのことですが、日本人と欧米人で回答の傾向が大きく異なることが興味深いものでした。



講師 鈴木 誠 教授

プロフィール

東京都生まれ。

東京農業大学造園科学学科教授、博士(農学)。国際日本庭園研究センター長。専門は、造園デザイン史・庭園論。



吉田 茂

プロフィール

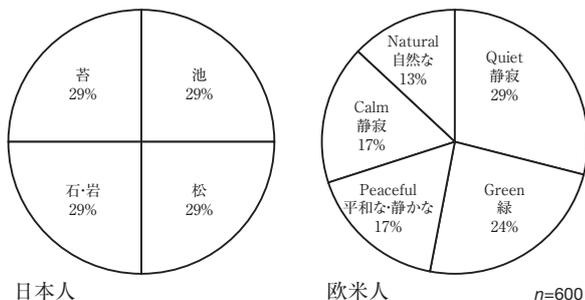
明治11(1878)年、東京都生まれ。第45、48～51代内閣総理大臣。戦後の混乱期にサンフランシスコ講和条約を締結するなど日本の政治、経済の復興に尽力した。大学卒業後は外務省に勤めており、中国、イギリスに駐在していた。そのこともあり、海外趣向という一面もある。

左／心字池の中島には七賢堂の仏を祀っている十三重の塔が建てられている

右／家族の要望で米国サンフランシスコを向いて立っている吉田茂像

(下記図参照)日本人は固有のモノをイメージするのに対して、欧米人は空間が与える心理的な現象をイメージする傾向があるとのこと。読者の皆さまは何をイメージしましたか？

日本人と欧米人の「日本庭園」のイメージ比較



旧吉田茂邸庭園をまわる

午後は、大磯ボランティア協会の方々に旧吉田茂邸庭園を案内して頂きました。

旧吉田茂邸は、明治17年に吉田茂の養父の健三が別荘として建てたもので、吉田茂が昭和19年頃から、その生涯を閉じる昭和42年まで過ごした邸宅です。平成21年3月には本邸が火災により焼けましたが、焼失を免れた日本庭園や歴史的資源等貴重な緑地を保存活用するため、平成21年7月に都市計画の位置付けがなされ、現在は平成29年3月の完成に向けて再建中です。

まず、最初に案内されたのがバラ園です。吉田茂は、人一倍バラが好きで、昭和36年頃日本庭園作庭とほぼ同時期にバラ園をつくりました。現在、バラ園の一部は駐車場になっているのですが、当時は千を数えるバラが咲き誇り、道路から見た景色は「吉田邸バラ園」と呼ばれるほど立派だったそうです。

バラ園から内門をくぐり、緑が美しい轍を抜けて日本庭園へ。この内門は、サンフランシスコ講和条約締結を記念して建てられた門で、別名「講和条約門」とも言われています。また、軒先に曲線状の切り欠きがあり、兜の形に似ていることから「兜門」とも呼ばれます。日本庭園は池泉回遊式なのですが、カナリーヤシというヤシの木や多くの花があり日本でも珍しい庭園となっています。これは海外生活が長く様式にとらわれない吉田茂の発想を造園家の中島健が表現したものです。

日本庭園を見た後は七賢堂、吉田茂像を訪れました。もともと七賢堂は、伊藤博文が明治維新の際の元勳である岩倉具視・大久保利通・三条実美・木戸孝允の4人を祀った四賢堂を自宅に建てたものでした。その後、伊藤博文が祀られ五賢堂となったものを、昭和35年に吉田茂邸に移設し、西園寺公望、吉田茂が加わり、現在に至ります。

旧吉田茂邸庭園の見学後は、大磯城山公園・旧三井別邸内にある国宝茶室「如庵」跡地を見学しました。「如庵」は織田信長の実弟、有楽齋の遺構で「国宝三名席」でもあります。「如庵」を忠実に再現した「城山庵」でお抹茶を頂き、見学会は幕を閉じました。



左／林道の奥にたたずむ七賢堂

右／大磯城山公園内にある茶室「城山庵」でお抹茶を頂く参加者